
夏祭り

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏祭り

【Nコード】

N5165V

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

中学校の時の夏祭り。その時密かに想いを寄せていた同じクラスの小林さんと一緒だった僕は浴衣姿の彼女に告白しようとしたけれど。ホワイトベリーの名曲をヒントにした作品です。夏の作品です。

第一章

夏祭り

夏になると。僕はいつも心が弾んで仕方なかった。

それで友達にも。いつもこう言ってた。

「やっぱり夏っていいよな」

「何だよ、水着か？」

「女の子の水着姿が見られるからだよな」

「違うよ」

それはまずは否定するのがいつもだった。

「確かに水着もあるけれどさ」

「ほらな、やっぱりそうじゃないか」

「水義あるじゃないか」

「それは否定できないだろ」

「できないさ。けれどさ」

僕は言った。友達に。

「そういうのじゃなくて。夏自体がさ」

「いいってどういうの？」

「夏自体が」

「それが」

「そう、凄くいいじゃない」

満面の笑顔で。いつも言っていた。

「暑い日差しも蝉の鳴き声も青い空も白くもくもくとした雲も」

「何だよ。もう夏全体が好きで仕方ないんだな」

「本当にそんな感じだな」

「夏がそんなに好きか」

「もう何もかも」

「好きで好きで仕方ないんだよ」

また言う僕だった。これもいつものことだった。

「本当にさ。海に行くのもプールに行くのも山に行くのも」

「街を歩く自体もだよな」

「本当に何もかもなんだな」

「うん、夏は大好きだよ」

僕はこう言っつて止まらなかった。

「何をするにしても」

「じゃあお祭りもだよな」

「それも好きだよな」

ある年、中学生の時になった。皆からこう言われた。

これまでのやり取りはいつものことだったけれどこの時はだ。この時だけのことだった。

僕は皆にこう言われた。

「神社の前のお祭りな」

「それもだよな」

「好きだよな」

「うん、それもね」

この時僕は。こう答えた。何も考えないで。

それでだ。また言ったのだった。

「楽しいじゃない。盆踊りの音楽に夜店にさ」

「それで夜店で色々なもの買ってな」

「あれは確かに楽しいよな」

「俺達だつてそうさ」

「またあるよね」

僕は笑顔で皆に言った。

「ほら、駅前の神社で」

「ああ、あるぜ」

「もうすぐだよ」

「御前も行くだろ」

「行くよ」

選択肢はこれしかなかった。

「絶対にね」

「よし、じゃあ皆で行こうぜ」

「女子も誘ってな」

「小林も誘うか」

「ここで。この名前が出た。」

「あの娘も来るよな」

「来るだろ、やっぱり」

「誘ったらな」

「えっ、小林さんって」

実は彼女のことが好きだった。同じクラスの背の高いすらりとした娘で。明るい性格ではつきりとした顔立ちの。この時の僕の好みの娘だった。

その娘が来ると聞いて。僕は。

何とか動揺を消して。それで言った。

第二章

「そうなんだ。小林さんも」

「ああ、どうせならもう大勢で行こうぜ」

「人数多い方が楽しいしな」

「だからな。もう呼べる奴皆呼んでな」

「楽しくやろうぜ」

「わかったよ。じゃあ」

今思うと僕はこの時下手な演技をしていた。内面を探られないようにして。けれど今思うとモロバレだった。皆ひよつとしたら気付いていたかも知れない。

そんな臭い演技をして。僕は頷いてだった。そのお祭りに行くことにした。

待ち合わせは駅前だった。駅前の噴水のところで。

僕はもう来ている友達のうち何人かとだ。こんな話をしていた。

「あの神社のお祭りっていいよね」

「ああ、夜店凄い多いしな」

「毎年凄いからな」

小林さんのことを考えながら話していた。実は。

けれど話はあえてお祭りのことにして。それで話していた。

友達も僕にとっては運のいいことに乗ってくれた。それだった。

僕はさらにだった。お祭りの話をした。

「綿菓子あるかな」

「そりゃあるだろ」

「フランクフルトにお好み焼きにたこ焼きもな」

「夜店の定番だ。ない筈がないものばかりだ。」

「それと後はクレープか」

「かき氷も絶対あるな」

「御小遣い全部持って来たぜ」

「俺もだよ」

「だよな。こついつ時に使わないとな」
「だからな」

皆だ。お金はここで思いきり使うつもりだった。
そして僕も。そのことを決めてこつ言った。

「よし、僕も」

「ああ、小遣いたっぷり持って来てな」

「御互いに楽しもうぜ」

「そつしような」

こつした話をしてだ。僕達は。

他の皆が来るのを待っていた。そして暫くして。

残りの男の子達も女の子達も来た。女の子達は。

皆浴衣だった。えんじ色やオレンジ、黄色に青、水色、そして白。
それぞれ金魚や菖蒲や朝顔、こつした柄の綺麗な浴衣を着ている。

その中で小林さんもいて。彼女は。

白い浴衣だった。白に赤や青の朝顔、こつした色の朝顔の柄で僕
達のところに来てくれた。その小林さんを見て僕は笑顔になりそ
うになった。

けれどそれを止めて。僕は皆に言った。

「皆来てくれたんだ」

「ええ、お祭りって聞いてね」

「毎年楽しんでるし」

「だからね」

女の子達が僕の言葉に笑顔で応えてくれた。

「じゃあ今からよね」

「お祭りに言ってね」

「楽しもう」

「そつしよう」

こつ話してだった。男の子達も。

僕と一緒に女の子達に声をかけていた。

「まさか皆浴衣なんてなあ」

「何人かは着てくるって思ったけれどさ」

「全員はないだろ」

「予想外の展開だよな」

「けれどいいでしょ」

女の子の一人、えんじ色の浴衣の娘が男の子達の言葉に笑顔で応えて言う。

「浴衣って」

「浴衣は魔術だろ」

「夏の魔術だよ」

「浴衣ってだけで人が死ぬぜ」

「なあ」

何故かだ。浴衣は兵器になっていた。

「何ていうか女の子を余計に綺麗に見せるっていうかな」

「和服美人か？夏の」

「あだっぼく見せてくれてな」

「浴衣を発明した奴は神様だよ」

「日本の生み出した文化の極みだろ」

遂には何処かのアニメみたいな言葉まで出て来た。

第三章

「その格好で出て来てくれてな」

「有り難いぜ」

「それも皆が皆ってな」

「これってどういう天国なんだよ」

「皆で話したのよ」

えんじ色の娘がまた話してくれた。

「お祭り行くのなら。もうね」

「浴衣を着てか」

「浴衣で武装して」

「いざ戦場に」

今度は戦場になつていた。どうも話が変にテンションが高かった。

「それで来てくれたんだな」

「いや、お祭りに浴衣」

「わかつてくれてるよ」

「我が生涯に一片の悔いなし！」

今度はこの漫画だった。とにかくお祭りと浴衣でだ。僕達のテンションは非常に高かった。そうなつてしまつていた。

そのハイテンションのまま僕達はお祭りに向かった。その時に小林さんを見た。小林さんは。

女の子達と明るく話をしている。その笑顔を見て僕は。

僕も自然と明るい顔になる。その僕に話してくれた。

その僕に。ふとだった。

女の子達が茶化す様にして。こんなことを言ってきた。

「あれ、何かにこにこしてるけど」

「何かあつたの？」

「いいことあつたの？」

「あつ、別に」

女の子達に言われて。僕はすぐに顔から笑いを消した。
そしてだった。慌ててこう返した。

「お祭りだからね」

「だからなのね」

「今からもう楽しみで」

「それでなんだ」

「そうなんだ」

僕は取り繕ったまま答えた。

「今から楽しみでね」

「成程ね。それでなのね」

「確かに。私も楽しみで仕方ないしね」

「私もね」

女の子達は僕のそれに気付かないでくれて。こう言うだけだった。

「何食べる？」

「たい焼きでしょ、やっぱり」

「焼きそばもよくない？」

「それによ」

夜店の話になる。これが楽しみなのは女の子達も同じだった。

「射的しない？」

「輪投げもよくない？」

「ヨーヨーもあるしね」

「金魚すくいも」

ここまではありきたりなやり取りだった。けれど。

小林さんがだ。僕に急に声をかけてきた。

「ねえ、何して遊ぶ？」

「えっ!？」

その小林さんに声をかけられてだった。

僕は目を丸くさせてドギマギとして。こう言い返した。

「何をつて!？」

「だから。何して遊ぶ？」

にこりとした笑顔で。また僕に言ってきた。

「色々もあるけれど」

「そうだね。遊びだと」

僕は必死に戸惑いながら内心を隠して。それで答えた。

「金魚すくいかな」

「そうね。金魚すくいね」

何時の間にか僕のすぐ隣に来ていた。背は僕の方が高い。けれど
どという訳か今は僕の方が小さく感じられた。彼女を同じ目線で見
ながら。

その目線で。小林さんは僕に答えてくれた。

「それいいわよね」

「いいよね」

「そうね。私金魚すくい大好きなの」

明るい、本当に何の曇りもない笑顔で僕に答えてくれた。

第四章

「じゃあそれするわ」

「そうだね。お小遣いは一杯持って来たし」

「あつ、私も」

小林さんもだった。お小遣いをたっぷり持って来ていた。

「もう好きなだけ遊べる位にね」

「持って来てるんだね」

「だから皆で一緒に遊ぼうね」

『皆』この言葉は余計だったけれど『一緒』という言葉がだった。僕は嬉しかった。

その言葉にだ。僕は舞い上がりそうになった。けれどだった。

すぐに他の皆がだ。こんなことを言ってきた。

「よし、神社だぜ」

「来たわよ」

夕暮れから夜のはじまりになるうとしている赤が消えて青、その次第に黒になるうとしている中に神社のシルエツトが浮かんでいた。左右には木々の影が見えていた。木々はもう夜の中に入っていた。そしてその神社からお祭りの音楽が、笛や太鼓のそれが聴こえてくる。夜店の灯りがこれでもかと思えていて。僕達の心を弾ませてくれた。

その前に来てだ。まずは男の子達が言った。

「じゃあ行こうぜ」

「もう夜店満杯だしな」

「最初何処行く？」

「お面買わないか？」

こんな話をしながら神社の境内に入った。普段は静かな境内の中も今は人で溢れ返っていた。

石の階段を昇って社に向かう一本道のところに来ると夜店が左右

に並んでいた。夜店の種類は本当に色々あった。
女の子達はまず綿菓子のところに向かった。僕達はたこ焼きだっ
た。

綿菓子の店とたこ焼きの店はそれぞれ向かい合っていて。僕達は
綿菓子を買って食べる女の子達をたこ焼きをはふはふと頬張りなが
ら見て。そうして話をした。

「皆いいよな」

「ああ、いつもよりもさらにだよな」

「うちのクラスって元々綺麗な娘が多いけれど」

「このことには正直かなり感謝していた。」

「今日はまた特別だよな」

「浴衣だからな」

「やっぱりそれが大きいよな」

「そっだよな」

本当にだった。浴衣だったからだ。僕達は女の子達を余計に見て
いた。

そしてだった。今度はだ。女の子達の誰が一番いいかだ。

そのことを話すとだった。話が余計にハイテンションになった。

「明坂よくね？」

「本多だろ」

「いや、阿澄だってかなりだろ」

「下田もよくないか？」

「麻子ちゃんだろ」

皆それぞれ話す。そしてだった。

一人がだ。彼女の話を出した。

「小林さんもよくないか？」

「只でさえ背が高いしスタイルいいしな」

「浴衣も似合うよな」

「モデルみたいだな。言い過ぎか？これ」

「幾ら何でもそっくだろ」

こんな話を笑いながらしていた。そこでだ。皆は僕にもだ。誰がいいか振ってきた。

「なあ、どう思う?」

「どの娘が一番いいと思う?」

「明坂か?それとも」

「本多か?」

「そ、そうだね」

僕は戸惑いながら。何とか泳ぎそうになる目に気をつけながら。

「小林さんかな」

「小林か?そうだよな」

「背も高いしな」

「御前はあの娘か」

「あの娘がいいんだな」

「うん、そう思うけれど」

自分の気持ちに嘘は吐けなくて。僕は小林さんの名前を出した。そしてその小林さんを見ながら。僕はまた言った。

「いいよね」

「本当にな」

「まあ下田もいいけれどな」

「阿澄もな」

「麻子ちゃんだったな」

皆何気にそれぞれの好みを出していた。けれど僕はやっぱりだっ
た。

第五章

小林さんだった。小林さんをどうしても見失ってしまった。そうしてだった。

綿菓子とたこ焼きの後は合流してフランクフルトもお好み焼きも何でも買った。まずはとにかく食べた。

焼きそばもたい焼きもクレープもだった。とにかく皆で徹底的に食べた。育ち盛りだから皆食べることにしては何の問題もなかった。

そして食べてからだだった。僕達は遊んだ。

射的もして輪投げもした。けれど景品は全く当たらない。

「絶対に当たらないようにしてないか？」

「そうだよな」

この時はまだ景品は夜店の景品は頑張れば手に入るものだと思っていた。けれどそれが商売であり絶対に手に入らないとわかったのは大人になってからだ。

そのことに気付かないまま。この時の僕達は話していた。

「まあ頑張つたらな」

「ああ、手に入るよな」

「糞っ、プレステ欲しいのにな」

「俺はラジコンだよ」

「私はぬいぐるみ」

射的でも輪投げでもだった。そうしたのは全然当たらなかった。

そうして誰が幾らやってもいい景品は手に入らないままで。僕達は金魚すくいもした。

その中でだった。僕が金魚すくいの水槽の前に座ると。

まただった。小林さんが隣に来た。膝を折って座って僕の隣に来て。

静かに微笑んで。こう言ってきた。

「お隣いいかしら」

「あつ、うん」

戸惑いながら。僕は答えた。

「いいよ」

「それじゃあね。やろう」

「僕金魚すくいはね」

僕は首を捻って苦笑いになって話した。

「あまり得意じゃないんだ」

「そうなの？」

「殆んど捕まえたことないんだ」

「紙つてすぐに破れるからね」

「そうだよ。本当に簡単に破れるから」

「難しいわよね」

小林さんも笑って僕に言ってきた。

「私もあまり得意じゃないの」

「そうなんだ」

「金魚つてすぐに逃げるし」

その素早さもまた憎らしいまでだった。僕は今でも金魚すくいは苦手だ。

「紙突き破るし」

「少しでも大きい金魚はそうだよ」

水槽の中の金魚達は殆んどが小さい。けれど中には何か大きいのもいたり黒いデメキンもいる。ああいうのは捕まえようとしても無理なのはこの頃もわかってきていた。

「何ていうかさ」

「金魚すくいって難しいよね」

「そうそう」

「けれどそれでもね」

どうかと。僕に笑顔で話してくれた。

「金魚すくいって楽しいよね」

「そうそう、すぐに破れるけれど」

「破れまいって必死になつてするから」

「面白いんだと思うわ」

こうした話をしながら僕達は金魚すくいをした。けれどだった。

僕も小林さんも一匹も捕まえられなかった。二人共紙をすぐに破られた。

僕は紙を見ずに入れて一匹捕まえようとしたらその端をやられた。小林さんは跳ねた大きい金魚に水に入れようとしたそこで破られてしまった。

こうしてだった。僕達は金魚すくいを終えて。お店の前から去ろうとする。

他の皆もだった。それぞれヨーヨーやスーパーボールを手にしながら言ってきた。

「その金魚強くないか？」

「滅茶苦茶元気いいだろ」

「変に大きいしな」

「何なんだよ」

こんな話をしてだった。僕達は合流してだった。そうして。

夜店のところから離れて。境内の静かな場所に来て。

そこで夜店で買った花火を出して火を点けて。今度はそれを楽しんだ。

普通の持つ花火だけじゃなくて鼠花火やロケット花火もやりながら。僕達はこんなことを話した。

「今年のお祭りっていつもより楽しいよな」

「ああ、かなりな」

「皆といるから？」

「そうじゃないの？」

皆花火をしながらこう話す。

第六章

「一人でいるより皆といる方が楽しいよな」

「ああ、特にこんなに大勢だとな」

「そうそう。皆で楽しむ」

「これがいいのよ」

夜店で買った食べものや飲みものも楽しみながら話していく。その中には当然僕もいる。

僕は持つ花火を点けて楽しんでた。その僕の隣に。

今度は気付いたらだった。小林さんがいた。

小林さんは金魚すくいの時と同じ座り方でいて線香花火を点けていた。小さくばちばちと光るそれを。温かい笑顔で見っていた。

その小林さんに気付いて。僕は声をかけた。

「それしてるんだ」

「うん、好きだから」

線香花火を見たまま。小林さんは答えてくれた。

「夏はね。毎年何回かはね」

「線香花火してるんだ」

「ええ、そうよ」

小林さんは線香花火から目を離さずに僕にまた答えてくれた。

「そうしてるの」

「線香花火つてさ」

僕もその線香花火を見ながら小林さんに話す。

「綺麗っていうか。消える瞬間がね」

「そうよね。儂くて」

「悲しく思うけれど」

「それが綺麗なのよ」

こつ僕に言ってくれた。

「そう思うのね」

「思うよ、僕も」

「じゃあ一緒にやる？」

僕も線香花火に誘ってくれた。

「今から」

「うん、それじゃあ」

ここで僕の花火が終わった。それでだった。

僕は小林さんの誘いに乗って。屈んで彼女から花火を受け取って。それからはじめた。

二人でやる線香花火はさつきよりも奇麗で儂く見えた。小林さんの顔がその光に照らされている。

その顔は本当に奇麗だった。まるでこの世にないみたいに。

その顔を見て。僕は。

言おうと思った。ここで。

それで僕の中にある勇氣、今も殆んどないそれを振り絞って。小林さんに声をかけた。

「あのさ」

「何？」

「僕、実は」

ここで言葉を一旦切った。一呼吸置いた。

それからだった。小林さんに言おうとした。

「前からね」

「前から？」

今言おうとした。けれどだった。

言おうとしたその瞬間にだった。皆の声がしてきた。

「おい、はじまったぜ」

「打ちあげ花火だぜ」

「いよいよはじまったわ」

「来たわよ」

こう言ってきた。僕達に。

丁度ここで僕達の線香花火が終わった。最後の滴が落ちて消えて。

光も消えた。

その光が消えた時に。皆が僕達に声をかけてきた。

「見ようぜ、早く」

「もうはじまつてるから」

「ほら、もう打ち上がってるよ」

「皆で見ようよ」

「う、うん」

「わかったわ」

僕も小林さんも皆の声に応えて。

すぐに立ち上がって皆のところに来て。それでだった。

今まさに打ち上がってきた花火を見た。その花火は。

ひゆるひゆると上にあがってそうしてだった。空に赤と白の大輪

の花を夜空に咲かせた。

花火はそれ一つじゃなくて次々にあがって。青い花もあれば黄色の花もあった。形も色々だった。

無数の花火が次から次にあがる。皆その花火達を笑顔で見ていた。

そうしてだった。皆で言った。

「やっぱり夏はな」

「お祭りの最後はな」

「花火だよな、打ち上げ花火」

「これがないとね」

「夏じゃないわ」

「お祭りじゃないわ」

笑顔でだ。それぞれ言っていた。

僕達もだった。その打ち上げ花火を見て。

小林さんが満面の笑顔で僕に言ってきた。

「綺麗よね」

「そうだね」

僕もその小林さんの笑顔を見ながら話す。

「とてもね」

「私線香花火も好きだけれど」

「打ち上げ花火も好きなんだ」

「そうなの、あの花火も」

好きだと。こう僕に話してくれた。

「大好きなの」

「そうなんだ。僕は」

ここでふとだった。また言おうとした。

小林さんに。もう一度。

それで言おうとしたけれど今度は勇気が出なくて。それでだった。

言おうとした言葉を打ち消して。それからだった。

「こう言いなおした。まずは。」

「いや、僕もね」

「打ち上げ花火好きなのね」

「そうなんだ」

にこりと。笑顔を作って小林さんに答えた。

「夏になったら絶対に見ないとね」

「気が済まないのね」

「そうなんだ。じゃあね」

「今こうして見ましよう」

「そつしよう」

「皆でね」

花火を見て。その光に、線香花火とはまた違う光に照らされている小林さんの顔は打ち上げ花火にも負けない位に奇麗だった。中学生の時の思い出だ。

あれから僕も大人になって結婚して子供ができて。今に至る。けれど夏になるといつも思い出す。あのお祭りのことは。それで皆のこと、特に小林さんのことも思い出す。皆それぞれの道で幸せにやっている。小林さんも結婚して幸せらしい。その小林さんに言えなかったことは。今の妻に言ってしまったって今こうしている。別の夏祭りの時に。

夏祭り

完

2
0
1
1
・
8
・
4

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5165v/>

夏祭り

2011年8月5日03時15分発行